

家：小説

著者	原，俊之
雑誌名	龍南
巻	2 0 3
ページ	4 8 - 6 5
発行年	1927-12-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/8967

家

原 俊 之

精二は出来るだけ音のたゞぬ様に、硝子戸を開けた。

「糟かい？」と茶の間から、祖母の聲。

「ハイ」と彼は答へて部屋に入つた。

「遅かつたな！お茶でも飲みに出で」

「ハイ……どうも濟みませんでした」と彼は詫とも、答ともつかぬ返事をして、手探りに電燈のスイッチを捻つて、
「今來ます」とつけ加へた。

彼は祖母が淋しがつてゐるだらうと思つて、心持ち早めに歸へつて來たけれども、机の上の目覺しはもう十時に近かつた。祖母は寢ずに彼の歸へりを待つてゐたらしい。友人から借りて來た、二冊のノートを机の上に、投げ出し上衣を脱いで、彼は祖母の茶の間に入つた。長火鉢の前で煙草を吸つてゐた祖母は「蒸すな！」と言ひながら羅宇を横にやつて煎餅の客つた盆を出した。彼は壁に倚つてキチンと坐り

「えゝ町の方なんかとても蒸し暑くて、雨にでも遇ひはせぬかと急いで歸へつて來ましたけれど……うちあたりは涼しい方ですよ」と言つて遠慮もせず盆の中に手を差込んだ。

「そうーなー一雨するとぼんによいがなー」と吐息まじりの祖母の言葉には元氣がなかつた。茶の間には入つた時から、彼は祖母の顔色の何時になく蒼白いの氣がついてゐたが、又亡くなつた伯父の事でも悔んでゐるのだらうと思つて、彼も一寸暗い氣になつた。

「青木さんはどうしてゐられるかい、此頃は遊びにも來られんが」と尋ねて「少し熱いけど」と斷つて茶を差出した。彼は左手でそれを受取りながら

「えゝピンボンと勉強で忙しいそうです」と答へた。

「あゝピンボンかい、あのデーフルの上でするとな」

彼は祖母のデーフルといふ發音が可笑しかつたのでハ、ハ、と笑つて

「えゝ、デーブルでするので、お祖母さんが何時か學校で見られた時『じやもじでするな』といはれた、あれですよ」と又ハ、ハ、と笑つてゐたが、茶をフーフーと吹いて飲み出した。祖母も笑つてゐたが自分の茶碗に茶を入れてから

「精二や」と靜かな調子で呼びかけた。

「えゝ何ですか」と彼はやさしく向き直つた。

「あのなーお前はまだ聞くまいが、さつき嫁が來て何でも何處かの銀行の社長さんとか支店長さんとかにあの母屋とこの離れを貸すことにしたからと言つて來たのでなーえらい事は初めたもんで……………別に家は新築すると言つてはゐたが……………一緒にゐるのがうるさうてなー一時鍛冶町の里へ歸らうと思ふてゐるのでな……………お前のよか勉強部屋もなうなりたい……………なー」と言つて火鉢の上を見つめたまゝ祖母は羅字に煙草をつめた。

精一は離れを貸すと聞いた時、ドシンと不意に胸を突かれた様に思つた。五六日前下男の作爺から「この家を貸して新らしい家を造ると奥様が云つてゐられました」と聞いてはゐたけれども、この祖母の隠居家を貸すとは思はなかつた。……………去年亡くなつた伯父が祖父母の老後にと丹青かけて五年前に造りあげたこの離れは——祖父はこの家の出來上る半年前に亡くなつたけ

れども——庭の奥の竹籬の側にあつて、さうやかな三間の家で、こぢんまりとした静かな隠居家だつた。田舎の古臭い家に育つた彼には宮殿の感があつた。夏の藪蚊こそ暇であつても、青木からは竹賢庵の綽名さへ貰つた程、彼の勉強部屋には勿体なかつた。……この祖母の家までも……？と思ふと彼は伯母の厚顔と身勝手に憤慨せられずにはゐられなかつた。その憤の中には

祖母を逐い出すといふことに對する不満よりも、「俺の勉強部屋までも……」と思ふことからの怒りがより多く含まれてゐた。

「新築の家は何處へ建てるんでせうか？」と彼は幾分てれ隠しに尋ねて見た。

「さあそれがさあ、この裏の柿畑だそうだよ、母屋の北にあたるけ『丑寅の金神だから西の方の畑では』と言ふて見たけど『そんな事は迷信ですよ』と嫁が言ふけな——、……家は二ヶ月ばかりでザツト造ると言ふてゐたけど、……さあ何ヶ月かゝるかな——。社長さん達は來月の中頃か末頃東京から來られるとかだけ、まあだ一月近くあるし家の出来るまではこの離れと、ほら表門の横のうちの空屋に二つに分れて住むと言ふてゐたがな——」と言つて祖母はかすかに眼をしばいた。

「……そうですか？……」と彼の返事にも力がなかつた。

驟雨だらう、庭の池に突然蛙の聲が喧噪ましくなつて強い土の香をサーツと窓から送つて、ひどい勢で降り出した。母屋で雨戸を閉める音に思ひ出して彼は「部屋へやの戸を閉めて來ます」と言つて立ち上つて行つた。

腹立たしい事を聞かされて彼の心の中は煮えくり返へる様に燃えてゐた。何時もはスラ／＼動く硝子戸も今の彼には妙にギョツといて容易に閉まらなかつた。風で吹きつけられた驟雨の飛沫しぶきは彼の顔に鋭い冷たさを感じさせた。思ひ切り大きな音をたて、雨戸を閉めて彼は祖母の所へ歸へつて來た。

「精二や、この雨でどうやら涼しくなるな——」と祖母は煙をふかした。

「やつと助かつた様ですね」と答へて彼は煙の行方を見つめた。だが彼の心は一向救はれさうにも思はれなかつた。青と白の煙は祖母の後の明け放された窓から入つて來る冷たい風ひたひたに一時翻弄ひたひたされてゐたがやがてサーツと外に消えて行つた。雨の音は一層はげしくなつた。

「ねーおばあさん今度の家にも亦伯母さんは離れを造つて下さるのでせう」と彼はやはくなつた煎餅を指でまげながら尋ねた。
「それがさあ、嫁は『今度の新築には立派な離れの間を一間造つて上げますから前より氣樂ですよ』と言つてゐたがな、わたしはそれが五月蠅くてな、やつぱり一人で飯をたいて食ふ方がよつぽど氣樂だて……」と言つて手すりで軽く羅宇を叩いた。
「そりやそうですけれど……おばあさん、一緒にゐたつていゝぢやありませんか、子供達は寄せつけないやうにしますよ、私が」と彼は慰める様に言つて見たが祖母はハ、ハ、ハと笑つて煙草をつめてゐた。

祖母は不思議に世間風の孫煩悩でなかつた。——精二は別として——特に伯父の子供を好かなかつた。『幼い時分は随分可愛がつてゐられましたよ』とは下男の作爺の話だつたけれども。二人の女中と一人の下男に傳つたかれ伯父伯母から甘やかされて育つた精二の従弟妹達の我儘と要らぬ贅澤とは幼ない時から士族の娘としてキツイ教育を受けて來た祖母には見るにも快くないのだとは彼にもうなづかれるのだつた。母屋から従妹の甘える様な泣き聲が聞えた時は顔をしかめて彼に不平を云つたものだつた。總領の英夫はそうでもなかつたが——初孫のせいでやつぱり可愛かつたには違ひない——それでも英夫が精二の部屋に勉強に來てゐて腰が痛いと言つて机の横に長くなつて寝をべつてゐる時、たまたま、茶菓子を持つて來た祖母は眼鏡越しにやさしく嚴格に叱りつけたものだつた。そんな時には精二は自分の不注意を裏面から指摘されてゐる様に感じて恐縮したことがつた。

「わたしもな、折角虎雄が建てゝ呉れたこの家で成佛するもんと思つて安心してゐたけど、又何處で死ぬか分らんごとなつてな、どうせ沙婆しやばにも一時ではあるけれどな」と祖母は淋しく微笑んで羅宇をしまひながら

「さあ遅くなるといかぬけ、もう寝やすみまつしよ、愚知ばかりいつてな、御苦勞だけど又蚊帳を吊つて呉れな、今晚も松が來なかつたけな」と言つて煙草道具を持つて寢間の方へ行きかけたが「あ、精二や、窓を閉めて」と頼んだ。彼は窓を閉めに行つた。雨は何時の間に止んでゐた。濡れた庭の立木が母屋の便所の明りを受けてキラ／＼と暗の中に光つてゐた。夜氣は夏分とはいへぬ程冷たかつた。彼は祖母の蚊帳を吊りながら「おばあさん、どうにかなりますよ、御心配なさるな」と言つて見たがやつぱり心は茫漠としてゐた。祖母は蚊帳の中から笑ひながら

「そうだけどな……まあお前もおやすみ」と返事をした。

彼は部屋に歸へつて机の前に座つたがかなり興奮してゐた。伯母や従弟妹に對する今までの窃かな不滿が今聞いた伯母の無分別——彼には少くともそう思へた——な計畫に機勢づけられて一時に擴大したのを感じた。事の實際は單に祖母の話だけではあらうけれど今度の仕打ちばかりは祖母と彼に對する腹癢せの様に彼には思へた。親類とはいへ他所の家に厄介になりながら庭一つ掃いて加勢するでなく、祖母に深く愛されてゐる自分は伯母にとつてはきつと苦がい非であるかも知れぬと彼は思った。従弟妹達の覺えの悪い事等が今では却つて彼に妙な快感さへ齎らしてくれた。——ノートのブランクをうづめる氣にはどうしてもなれなかつた——學期試験は一週間後にせまつてゐたけれど。——「癪だな」と彼は小さくつぶやいて、床を敷いて寢たが寢つかれる筈がなかつた。新築の家に對する淡い好奇心さへ今の彼を鎮めるには充分ではなかつた。……少し位五月蠅かつたつて里にまで歸へらんでも自分の家だもの一緒にゐて呉れてもよさそうなものと……祖母の頑固心らしいものを怨んでも見たが、祖母の氣性をよく知つてゐる彼はどうしても反對等はされなと思つた。そして幾ら割引しても伯母を憎む感じは減じなかつた。あれこれと思つて寢つかれぬ体を何度も寢がへり打つて——明日伯母にどうか願つて見たなら——とかすかな見込みを勝手につけてやつと目蓋を閉ぢた頃は茶の間の柱時計が十二時を廻つてかすかに半の音を響かせる頃であつた。

二

精二は祖母の二番目の息子の總領だつた。祖母には男三人女二人の子供があつた。三男は七つの時に亡くなつたそうだ。女の子即ち精二の叔母さんは一人は長崎に一人は小倉に嫁付いてゐた。

精二の父は小さい時から在の豪家に懇望されて養なはれたのだつた。永い官吏生活の後田舎に引籠つた精二の父は、フトした機會で友人の選舉運動から政黨に關係しかなりの養家の財産を蕩盡して揚句の果が腦溢血で斃れた。精二が十二の時だつた。後には養祖母と母と精二と彼の弟の生活費と學費にやつとの財産しか残つてゐなかつた。

精二がK市の高校に去年入學した時一番喜んで、

「學校には少し遠いけどな、他人ばかりの寄宿舎に居るよりも内からお通ひ、子供は居ても勉強されない事はないだらうからな」と言つて伯父の家から通學をすゝめてくれたのも祖母だつた。伯父も——精二は伯父の顔を見る度にその精二の父と瓜二つの面影は精二に父への悲しい追憶を呼び醒まされずには居られなかつたのだが——「どうだい精二、内の英夫も來年から中學だが教育かたがた内から通つて呉れては」とやさしくいつてくれたものだつた。併し彼は「えゝ來年から來ませう、寮の方もとても面白いですからね」と漫然と諾して居た。彼の氣性を知つてゐる母は家計不如意でも、入寮にはたつて反對もしなかつた。

所謂感激の生活が學校や寮の年中行事で進行して、一學期は彼にとつても所謂白駒過隙の譬であつた。期待に滿ちた夏休みが晝夢で短かくされて彼が再びK市の驛頭に立つた頃はK市には猛烈にチブスが流行してゐた。寮の豫防法は細心であつた。併し二週間の後には彼自身罹病してゐた。四十日の煉獄の苦を、終えてやつと快方期に向ひ看護に憔悴した母の歡喜の中にも、S病院の薄暗いベットの上にやつと起きあがれる位になつた霜月の或る夜、悲しくも同じ病の伯父の死は報ぜられた。彼は伯父自身のためそして又祖母のため泣いた。外では木枯がカサカサと落葉を追うてゐる寒い晩だつた。鐵火鉢の炭火は赤くカン／＼おこつてゐた。

x

x

x

一年休學して彼は翌年の新學期には亡き伯父の家に厄介になつてゐた。伯父の生前にはまだ息子がゐますのでな」と言つて白髪まで黒く染めてゐた元氣な祖母も見違える程弱はつてゐた。勿論白髪だつた。それでも隱居家でやつぱり前通り一人で御飯を炊いてゐた。彼が離れの座敷の間に來たので「心強くなつた」と言つて心から喜んで呉れた。精二の食事は母屋であつた。斯うして祖母と精二は一緒にあるのだつた。

三

「精二や、學校はないのかい」と早起きの祖母は佛壇の花の水を換えながら精二に呼びかけたが彼はまだグッスリ寝てゐた。八時はどうに過ぎてゐたけれども。祖母は「折角寝てゐるのに」と思つたのか黙つて長火鉢の横で煙草を吸ひ初めた。九時過ぎてやつと彼が眼を覺ました時には蚊帳と硝子戸越しに庭の立木が蟬の聲さへ含んで、夏の朝の日光を受けて昨夜の雨にシツボリ濡れた地面に濃い、影をクツキリと落してゐるのが見えた。

「二時限目迄怠業^{サボ}るかな」と臍^{はら}をきめて彼はゆつくり床をあげて洗面所に行つた。頭の中ではもう例の事が苦しくもつれ初めてゐた。

「伯母さんは？」と食事の時女中に尋ねたら

「大工さんの所へ行かれました」との返事。……さては例の計畫の實行をやりやがるな……と思つて、何とか伯母に願つて見やうとの昨夜の考へはすっかり消えてしまつて、又癪にさはり出した。御飯の味は勿論なかつた。——そうだ青木にこの事を話して一緒に憤慨してやらう。そしたらいくらか腹も癒えるだらう——と思つて彼は四時限目に間に合ふ様に學校に出かけた。

其處には相變らず單調な授業が待つてゐた。S教授の朗々たる講義を美しい伴奏として、彼は読みかけのウエルズの Love and Mr. Lewisham を読み出した。併し例の忌々しさに惱まされてゐる彼にはウエルズの輕快な文章さへ頭に入らなかつた。晝の休憩時間にも周圍に超然として讀んでゐたが、學期試験が直ぐなので復習に餘念のないグラツバーの友を嘲る小さな示威運動の様に皆から思はれはしまいかと、かすかな自己毀損をさへ感じて彼は本を閉ぢた。彼は實際ノートのブランクさへまだうづめてゐなかつたのだ。思ひ出して彼は急いで青木のクラスに行つて見たが五時限目から實驗なので特別教室に行つてゐるだらうとの事で、青木はゐなかつた。彼は特別教室まで行つて彼の實驗の邪魔でもしてはと思つたので失望しながらも教室に歸へつて來た飯

——精二の學校での唯一の友は一年を先じた青木だつた青木はSBだつた。中學時代から同窓で五年間寄宿舎の同じ釜の飯を食つた親友だ。忙しい理科生にも拘らず思想に文藝に深く親しんでゐる青木は文科の彼にはよい話相手だつた。——

教室に歸へつて來た彼は机に着いて何かしきりに書いてゐた樋口に昨夜のノートの禮を言ふたが樋口は樋口で「何あーにー」と答へただけで、まるで話相手にならなかつた。

四

やけつく様な暑さと學校での失望とそれに例の不満で軽い頭痛をさへ感じて彼は四時頃家へ歸へつた。伯母とは炊事場で會つたけれども一寸挨拶を言つただけで心中では「何にこの伯母め：」と穢く罵つてゐた。

彼は庭を通りしな格子戸から祖母の姿をチラツト見たが、する事もなさそうに火鉢の前で煙草を煙かしてゐた。「只今歸へりました」と縁にあらりながら彼は挨拶したが「お歸へり、暑つかつたらうな」と何時もの返事だつた。精一は溜息して机の前に坐つたが心からあの考が去る筈はなかつた。——「この部屋も庭ももうしばらくだな——」と茶の間に聞えぬ様に小さくつぶやいて机に肘をついてボンヤリと庭の方を眺めた。昨夜の雨で踏石の下の方々が青々と一杯に擴がつてゐた。

ブランクをうづめにかゝつたがそれは専心し得ぬ彼の、仕事ではなかつた。一頁もうづめぬ中に彼はゴロツと仰向けになつて吉野杉だと英夫が何時か説明した木理の正しい天井板を數え初めた。ジーツと鳴いてゐた外の蟬の聲がハタと止んで彼の耳に空息した様な音韻を残した。フト右の手に靴が觸れたので、彼は思ひ出してウエルズの本を取り出して寝ながら読み出した。……二三頁讀む中彼は起き上つて本氣に讀み初めた。ルウイシャム君の大家には彼も少々僻易したが、若きタイピストとの散歩を學校の校長に見付けられ散々油を搾られるあたりからウエルズのヒューモラスな文章はとう／＼彼を捕へてしまつた。ルウイシャム君がフトした機會で社會主義を知り悲憤慷慨して薄暗い下宿の部屋で社會革命を宣言し『赤はこの心のシムボルだ』と、愧づかしげに店で眞紅のネットタイを求めて、首に巻き

The first time that symbol went abroad a string of stalwart policemen were walking in single file along the Brompton Road. He began to hum. He passed the policemen with a significant eye and humming the Marseillaise. …… のあたりに來た時は彼の心は有

頂天になつて机を叩いてん喜だ。その時

「精二や、何を喜んでゐるのかい」と祖母が笑ひながら彼の部屋には入つて來た。

「何ーに、おばあさん、本があまり面白いので喜んでゐたんですよ、おばあさんに分ると讀んで聞かせますけれどねー」彼は快活に笑つた。祖母も一緒に笑ひながら縁に出て障子の闕に腰を下してから

「精二や、濟まんけど、この御籤を讀んでお呉れ、今日、お稻荷様から書いて頂いて來たけ……」と紙片を彼に差出した。「ハイ」と答へて彼も縁に出てそれ受取つて一寸一人で讀んで見ながら「では讀みますよ」と前置きして讀み出した。

「えーと、九紫八星、七十二の女、月占ひ、……一月、この月は萬事好都合也、但し辰巳への旅行は止るべし二月……」

「あゝ一月なんか要らんよ、今月から六月からでいゝよ……」

「ぢや六月から……六月、この月は思ふ事詮はぬ月にて諸事成り難し、他人の言葉に逆らはざるをよしとす、何事も辛抱すべし……七月、この月は先月の謹み申斐ありて吉也、盜難に注意すべし八月……十二月……です」彼は讀み終つて紙片を前の通りに折つた。

「あゝ御苦勞だつたな」と言つて祖母は彼の方に振り向きもせず、凹んだ眼で庭を凝視めてゐた。隣の土塀から夕餉の煙だらう黄昏時の黄金の絲の様な日射の中に青く白く搖れてゐた。

「精二や、やつぱりこの月は人の言ふにはたて、ついてはいかぬと書いてあるな……もう家の事も嫁のえゝごとするがよからう。私しや黙つておかう……」と祖母は大きな吐息をした。

「えゝそりやそうですけど、伯母さんはあんまり勝手ですよ、折角伯父さんがお母さんの爲に造へて下さつたこの家迄も他人に貸すなんて、伯父さんは地下でキツト腹を立てゝゐられるでせう。僕も伯母さんに願つて見やうかと思つてゐましたけれど、何だか言ひ難いし……ねーお祖母さん、この家だけは貸さぬと云つたらいゝぢやありませんか？」と彼は前を凝視めたまゝ眼を瞬いてゐる祖母の蒼白い横顔を見るとやつと最後の言葉を云つたが一生懸命だつた。

「お前もな！そう思つてくれるかい、お前のお父つあんにこの虎雄迄死んでしまつてからは、わたしもよつほど弱つてな！。長崎や小倉の娘からも来い／＼と言つて来るけど、もうとてもと思つて、こゝで立派に成俵されると安心してゐたがな――」

「……………」彼は胸のつまる思ひだつた。

「あれが死んでからは、知つての通り嫁がハイカラで、我儘でな！、あの通り、母屋が古くて氣にくはんと言つては色々造作してゐたがそれにも飽いて、又新しい家を造らうといふてゐるのでな！、あの様にまだ立派な母屋が嫌になるなんて何んな考へか知らぬけど、先祖様からの家をあゝの、こゝのて造作したとちや崇^{たか}りを受けると思ふけど、言ふたとして聴く嫁ぢやないけんな……私しや四十年も住でんあゝの母屋からこのせまい離れに移つて來た時さへゲツソリして「あゝこんな所に……」と虎雄に言ふて泣いたことだつたがな……」

「ハ……イ」精二は何とも言へなかつた。かすかに相槌を打つては見たが、涙まで出して、何かを見つめてゐる祖母の姿を見るさへ辛かつた。陽の光はわづかに青桐の葉に残つてゐた。蟬の聲すら一瞬間靜まつた様に思つた。

「ね……お祖母さん、もう少し伯母さんに反對されるといゝんですけれどね……」とやつとつぶやく様に言つて見た。

「……反對もしたいけど、な！精二や、どうせ沙婆に永くはないものが若い者に反對した所でな……」

と祖母の返事は沈んでゐた。幼ない時は鎌刀使つて男優^{まう}りだつたと父から聞いてゐたが、何故年をとると心造^{こぞう}がこんなに弱るのだらう、彼は祖母の今の氣性が齒痒^{はしか}ゆかつた。

「英夫さんにでもよく云つて聞かせになつたらいいですよ、ね！お祖母さん」と彼は祖母の方に向き直つて言つた。祖母は一寸微笑だ。

「英夫もな！、もう少し大きいと、せめて十七八にもなれば分りもせうが、まだまるで子供でな！、特別あまやかすもんだから十四にもなつて嫁の里にも一人で行ききらんでな！、長崎の慎一は英夫と相年^{あひどし}だけど、小倉の伯母さん所へ一人で行ききると娘が言うてゐたがな！、あんな風に育てゝ先はどうなるやら……………わたし死んでしまつて英夫が大きくなつたなら、新しい家

も飽いたと言つて今の母屋を毀^こして立派な西洋館^にも建^たつるだらうな——ハ……」と祖母はかすかに笑つて見せたが、何だか濕^しつぽい笑いだつた。彼は祖母の横顔をチラット見てすぐ眼をそらした。見てならない物を見た愧^はしさを感^かじて。一滴の涙が祖母の頬を傳つてゐたのだつた。流れる涙も拭き得ない程祖母は悲しいのだ。精二は磨^こ鐵^{てつ}を浴びた様に感^かじた。言葉は冷たい、この熱い感^{かん}じを傳えるにはあまりに言葉の慰めは冷たすぎる。彼は何とも云はなかつた。祖母はやつぱり庭を見つめてゐるらしかつた。美しい庭——永年祖父と共に手入れして來たこの廣い美しい庭——までも他人に貸して畑の中の新築の家へどうして祖母が行きたからう、……精二の父の死の悲しみはもう忘れ得るとしても、わづか四五年の間に連れ合いと、頼みの總領を失つて、信頼も置けぬ伯母の放縱な家計振りは祖母の眼には先が見え透^といてゐるに違いないと精二は思つた。祖父と共に折角維持して來たこの大家がすぐ倒れるとは思はなくとも「自分が死んだ後は……？」と想像する時の祖母の心は………と思ふと精二は他事だと平氣で居れなかつた。

「精二や又愚痴を云つて勉強の邪魔をしたな——さあ一つ夕飯の用意どもせにや——」と靜かに立ち上つた。

「ねーお祖母さん英夫さんがもし分つて來たらよく云ひ聞かせになればいいですよ、僕も英夫さんには充分氣つけますからね」と慰める様に言つて見た。

「あゝ有難う……：……お前も折角だから英夫達をしつかり教育せねばな——」と祖母は流しの方へ行つた。

一人になつた精二はボツネンと暮れかゝつた庭の木立を眺めてゐた。思ひは千々だつた。彼は故里の養祖母や母の事をフト思ひ出して何故かしら止めどなく涙が出た。熱い涙だつた。……：……そして又嘗つて見た「オーバー・ゼ・ヒル」の悲しい嬉しい場面、を思ひ出した。末弟ジョンが母と養老院での邂逅、馬車の中の二人の温い抱擁、微笑む御者の顔……：「岡を越えて！岡を越えて！」彼は辯士の聲をさへ思ひ出した。そういへば今度の事は何だか「オーバー・ゼ・ヒル」の悲話にさへ似てゐる様に思つた。あの時は不幸だつた母は最後の幸福を得たけれど、祖母の受難は之から初まるのではないかしらと彼は思つた。……：銀治町の里に歸へると昨夜云つてゐたが祖母の心は苦しいに違ひない……：

台所の方から祖母のたく々炊の煙が彼の部屋に流れて来てフワリ／＼と庭の木立の中に消えて行つた。外は全く黄昏れてしまつた。蟬の聲も殆ど止んでしまつた。藪蚊が一つ二つ彼の体に五月蠅くつけまゝとつてゐた。机の前に歸へつて電燈のスウツチを捻つて見たがまだつかかなかつた。ウエルズの本を片づけてゐた時母屋の縁から「精二さん御飯ですよ」と祖母の聲がした。祖母を呪つてゐる彼はわざと返事もせずに庭の方へ降りて行つた。

部屋の電燈がバツトついた。

五

彼は食事の時伯母に

「家を貸すそうですね」と尋ねたが、その調子には針を含んだ鋭さがあつた。

「えゝ到頭貸すことにしました。一時精二さんは隣の空屋あきやの二階で英夫達と辛抱して貰ひませう、家が出来るまでね」と伯母は平然としてゐた。「おばさんの離れまで貸すそうですね」と喉まで出たけれども、それはどうしても言ひ得なかつた。

「〇〇銀行の支店長さんが今度赴任して來られてこの家を是非ともとの事だね、何しろこちらがこの間、家を建てたい等と〇〇銀行の津村さんに云つてゐたものですからね。早速頼まれたのですよ。銀行の事で秘密話もあるから離れは是非必要だと懇望されるのでお祖母さんには濟まないけれども貸すことにしましたよ。お祖母さんには今度の家に立派な隠居部屋を造へてあげますから今より却つて樂おもしろでせうよ」と笑つてゐた。

銀行屋連中の醜い秘密話位のためにあの離れを貸すのかと思ふと彼の憤怒は飯を喉に通しても呉れなかつた。又その位の申出に諸々として、「いゝ金儲けだらう！」と手柄振つて洒々しゃやくしてゐる伯母の横顔に茶碗を投げつけてやり度い程だつた。

彼は夕刊をも見ずに部屋に歸つた。英夫が本を持つて勉強に來た。併し彼は一言をも發しなかつた。蚊取線香に火をつけて机の間に置いた。

蒸し暑い夜だ。

六

苦しい試験中は忙しさに紛らされてゐたが毎日裏の柿畑から聞えて来る鑿や鋸の音は時々彼を堪えきれない憤怒に導いて行つた。祖父の植ゑたたくさんさんの柿の木が秋の豊かな收穫を見せながら大工達の手で切り倒された時は伯母さへ一寸暗い顔をしてゐたが、それを見せつけられた祖母や精二の心の中は伯母以上だつた。に違ひない。精二の試験が終つて新の盆がやつと濟んでから彼は歸省したいといふてゐたが、伯母から、もしゐて荷物の片づけを加勢して呉れとの頼みだつたのでたつて斷りもしなかつた。彼も英夫の加勢で本やら荷物やらを例の二階に移したが、天井もない屋根裏の煤けた疊の上に散らばつた本の間に坐つた時には俄かに零落した様と思つた。

例の銀行屋が移つて來るといふ前日の朝、祖母は鍛冶町に行くと言つて伯母を驚ろかした。

「家の出來るまで一緒に、我慢して下さいまし」と伯母は義務的に言ふてゐた。精二も祖母を留めたかつたけれども言葉上でも伯母に味方するのが嫌なので黙つてゐた。併し何ともいへない哀愁を覺えた。

暑い朝だつた。大きな信女袋——之は祖母の母譲りの品だと聞いてゐた——を車夫に運ばせないで彼が祖母の足下に載せた時「あゝ御苦勞だつたね、しばらくさようなら、家に歸へつたらお母さん達によろしく」とかすかな聲で云つた。従弟妹達は學校に行つて、ゐなかつた。伯母は女中達と女關に立つてゐたが、

「では御用心なさつて」と澄まして云ふてゐた。

祖母は俵の上で色の褪せかゝつた黒の洋傘を開いて、

「さようなら」と挨拶した。車夫は楯をとつた、伯母は女關ぎりで門迄も出て來なかつた。精二は車について門の外に出た。

「精二やもういゝよ達者でな〜」

「ハイではお祖母さんも御機嫌よろしう……」

俤は走り出した。彼は門の前に佇んでその後を見送つてゐた。曲り角の前で祖母は一度振り返つて彼に挨拶した。彼もやつと頭を下げたが、胸の熱くなるのを感じた。涙が頬を傳つた。泣き顔を人に見られてはと思つて急いで門の内に入つたが彼は「ヒョットしたら之が見おさめでは………」といふ様な懺感さへして、急に悲しくなつて、涙が止めどもなく流れた。

玄關のたゞきに朝の太陽が白くギラギラと灼きつけてゐた。

×

×

×

伯母は厄介者があなくなつたとしても言つた風で何時もより元氣そうに女中達を指揮して荷物を藏の中に運ばせてゐた。精二はもう我慢し切れなかつた。伯母が玄關の間に來たのを捉えて、

「伯母さん、あなたはおばあさんが可愛想だとは思はないのですか……」と思ひ切つて言つて見たが半分は泣いてゐた。

「えゝ何ですつて？」と伯母は美しい眉を寄せた。

「えゝ伯母さんは……逐ひ出したんです、逐ひ出したんです……」と彼は情に押されて涙をボロ／＼と落しながら伯母を責め初めた。

「精二、お前は何といふことを言ふのかい、そんな事がよくも云へる事ね、人を馬鹿にするでないよ、私がお祖母さんを逐ひ出したなんてお祖母さんこそ自分で出て行かれたんじゃないですかい」と伯母は顔をしかめて台所の方へト行かうとした。

「伯母さんは知らないのです、お祖母さんの苦しみなんか、……：……僕も今日歸へらして頂きます……」と彼は庭でボンヤリ成り行きを見てゐた女中達にバツの悪さを感じながらも、涙をふき／＼部屋に歸へつた。伯母は一人で精二を罵つてゐた。

七

夏休みも決して楽しくはなかつた。それでも養祖母や母の愛情は彼を不快な記憶から遠ざけてくれるに充分だつた。母にはこ

つそり事を話して見たけれども「姉さんもし少し辛抱すればいいのだけれど」と精二には意味の分らぬ事を言つてゐた。

二學期には彼はやつぱり伯母の家に居た。彼や英夫達が見すばらしい屋根裏から木の香も新しい新築に移つたのは九月の末だつた。彼等の部屋は西と南が開いてゐたので、竹藪と樟の林を通して田圃越しにA海の新風さへ傳へてくれたのでもう冷つこい程だつた。

伯母や従弟妹達の徹底的なブルジョアイデオロギーには彼もほと／＼食傷した。併し彼はどうしやうともしなかつた。まだ中學一年の英夫に——ブルジョア意識の最も強い英夫に——今更社會制度の欠陥を説いても初まらないと精二は考へてゐた。伯母や英夫達が召使達に絶對服従を強いて酷使してゐるのを見せつけられては彼の心はおさまらなかつた。英夫にこつそり言ふて聞かせて見たがやつぱり駄目だつた。

精一は伯母に對しては變らざる敵愾的な心を抱きながらも一年は矢の様に流れた。その間祖母からの代筆の頼りは銀冶町、長崎さては小倉からと二三ヶ月毎に消印が變つてゐた。頼りの中には伯母を怨む様な文句は一つだに無かつた。……自分は何處に行つても可愛がられるから幸せだとか……充分体に氣を附けよ……といふ時候の挨拶位のものだつた。併し精二は祖母からの頼りに接する毎に嘗つての出來事を思ひ出して伯母に對する腹立しさが甦つて來るのだつた。

精二が二年の二學期を迎えて伯母の家に歸へつて來た時、一年前とは似ても似つかぬ痩せ衰へた祖母を新築の離れの間に見出した。

「精二や、とう／＼歸つて來たよ、弱はつてしまつてな、もう長くはないと思つたけ、やつぱり家が戀しうてな、死ぬならやつぱし家の近くで死にたいけん」と恐ろしく窪んだ眼の奥にかすかな笑を浮べてゐた。精二は返事する元氣もなかつた。

伯母は、

「初めから此處へ居なすつたらよかつたんですよ」といつて平氣で笑つてゐた。その言葉を聞くと彼は身震ひする程腹が立つて掴みかゝりたい程だつた。祖母は「そうだつたな」と聲を出して笑つてゐた。

八

精二の部屋の西北の隅に四五本残つてゐた柿の木の色く黄ろくなつた病葉がカサツと落ちて里芋を圍つてある藁の上にとまつてゐた蜻蛉が驚ろいてツイと飛んで行つた。「秋だな……」と彼は小さな自然を見つめてつぶやいた。そして秋の齋らす悲しい病の追憶が心に浮んで來た。彼は時々遅くまで祖母の部屋で語り更かしたが、彼は出来るだけ祖母を昔話から遠ざけるのにとめた。祖母にとつても彼にとつてもそれは悲しい涙だつたから。

夜の靜寂を震まじりの雨がひつそりと過ぎて行つた或る寒い晩から祖母は枕が上らなくなつてしまつた。勉強が濟んでから祖母の側で話をするのが彼の日課の一つになつた。遊びに來た青木が彼と一緒に見舞つた時等は祖母はじやう談か真か、

「精二や、青木さんと仲良くして行つて呉れな、わたしは今度はキツト死病だから……：：：草場の蔭から皆さんを守つてあげやうな、青木さん、どうかこの子を頼みますよ……」等と云つてかすかに微笑んだ。その時青木は返事に當惑して眞赤な顔をして「そんな事があるのですか……」と言つてゐた。精二は何だか祖母の死を直覺した様に思つた。そして無性に祖母が哀れでならなかつた。

×

×

×

×

×

×

霜月に入つた。野分が木枯に變つて藪の下の笹の落葉がカサ／＼と風に舞ふ頃祖母の衰弱は募つた。そしてその頃から祖母は口癖の様に、或る時は囁言の中にも

「母屋に歸りたい、母屋の座敷で死にたい」と言ひ出した。伯母は苦い顔をしてゐた。長崎の叔母も小倉の叔母も來た。血縁の親族に圍まれて祖母はやすらかに眠る日が多くなつた。併し眼覺めてはきまつて例の望みを叫ぶのであつた。長崎の叔母等は「精二さん困つたね」と悲しい顔をして彼に言つた。併し母屋を死に場所に貸して呉れとはいくら所有主でも申出でられなかつた。

霜月が終りかけた頃から祖母は

「虎雄の命日にはきつと死ぬ」と云ひ出した。母屋に歸へりたいといふ願は云はない日はなかつた。

.....

祖母は師走に入る迄持ちこたえた。——命日にも息子に後れたのだと精二は思つた——そして雪でも降りはずぬかと思はれる灰色に包まれた寒い夕刻、——前の日に精二と叔父達が支店長の家に願ひに行つて、あの戀居屋に祖母の病体をやつと運んだのでいくらか安心した故か——皆のはげしい涕り泣きの中に祖母は今迄の囁言もいはずに安らかに旅立つて行つた。瘦せ衰えた顔ではあつたが美しい平和な死顔だつた。

伯母の泣く姿を部屋の間でチラツト見た時、精二は

「おばあさんを死なせたのはお前だ！」

と飛びかゝつて行つて、打ちのめしたい衝動に驅られたけれども尙一層涙に逼られて祖母の薄團に、顔をうつめてしまつた。

九

喪中の新年は淋しかつた。

×

×

×

精二が伯母と劇しい口論をした揚句、遂々すて台白を残して、學校近くのさゝやかな下宿に移つたのは、祖母の四十九日が齋んで三日した、或る日曜の夕方であつた。

すべては祖母の死によつて清淨められたのだと彼は思つて、——祖母の不遇を悲しまないことはなかつたとはいへ——伯母に對しても、何事にも悪氣ない様にと、つとめてゐた。併しそれは結局祖母の死の悲しみが一時消してゐた導火線であつた。……そして彼がふとしたことで、英夫に與へた体罰が、再び導火線に點火したのだつた……伯母は怒つた。彼の憤慨も勿論爆發した。彼は内心えらいことになつたとは思つたものの、甘い正義感すら手傳つて、伯母と英夫を前にして、論争した。わけでも伯母の従弟妹達に對する放縱なる訓育を強く罵つたのだつた。

その日の晝食は彼の喉に冷たかつた。

絶縁だ！——之が最後の晝食だ！——と思ふとやつぱり彼は何とも云へず悲しかつた。

多くの書籍の亂雑した中で彼は片づける元氣もなさそうにボツネンとしてゐた。青木は側で行李の繩を解いてゐた。精二は吐息して、一重ねの洋書の方へ眼を向けてゐたが、フト、ウエルズの“Love and Mr. Lewisham”が目にとまつた。彼はそれを取上げて、見覺のある頁を開いて黙つて讀み初めた。……彼は悲しい記憶が甦つて來たのだつた……

靜かに本を閉ぢて、放心した様に、前方の庭を凝視めたまふ彼は低音で Marseillaise の歌を唱ひ出した。青木は變に思つたのか「おい竹下どうしたのかい」と行李から手を放して、彼に尋ねた。

「いや、何でもないさ……」と彼は歌をやめて書物を整理し初めた。

外は二月の初めといふに、珍らしい暖く晴れた日和であつた。淡い夕べの日射しが隣の白壁に赤く残つてゐた。

(一九二七、九、二五、)